

令和3年度 北海道青少年育成大会 Web開催

開催期間 令和3年9月10日(金) ~ 9月30日(木)

青少年育成活動推進のため、初のWEB開催を実施

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、会場での開催を中止し、初めてWEB方式で開催しました。

WEB上に、北海道青少年基金事業顕彰の受賞者発表、「青少年の活動発表」や、先進地の「事例発表」、また、昨年度は開催が叶わなかった「少年の主張」全道大会は、最優秀賞をはじめ地区大会代表者の主張動画を掲載しました。

基調講演は、東京都のNPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワークの栗林理事長にお願いしたところ、快く動画掲載のご了承をいただきました。そのほか、全国高等学校定時制通信制生活体験発表大会の北海道大会最優秀賞の発表動画を掲載するなど、多くの関係者のご協力により、無事、WEB開催を実施することができました。

令和3年度 北海道青少年基金事業顕彰は遠藤優珠さん(旭川市)が受賞

この表彰は、道内で優れた地域活動を展開している青少年団体や青少年の功績を讃えるものです。

今年度は、中学生の頃から社会活動に積極的に取り組み、中高生を中心とした活動団体を複数創設し、代表として活躍した、旭川市在住の遠藤優珠さんが受賞しました。後日、当協会より賞状と記念品を贈呈する予定です。

※遠藤さんの功績につきましては、7ページをご参照ください。

青少年の活動発表 NPO法人E-LINK(札幌市)「子どもと地域の人に関わる場所をつくる」

NPO法人E-LINKは「なまら、ツナガル」をミッションに、学童保育「アドベンチャークラブ札幌」、フリースクール「LIKEPLUS」、子育てサロンなどを運営し、子どもも親も地域も、全ての人が多様な世界と繋がる機会を作っています。

日向代表理事から、今年始めた寺子屋事業「おちゃのま」について、お寺の住職さんの思いと一致して実現したこと、学生が企画運営していること、居場所を通して地域が繋がる様子がメディアからも注目されている、などの説明があり、運営する3人の学生からも「人とのつながりを実感する、子どもの『やりたい』を引き出したい」との思いが語られました。最後に、コロナ禍だからこそつながり、子どもの「学びと、遊びと、生活を止めない」という熱いメッセージが発表されました。



事例発表 西部コミュニティ・スクール運営委員会(北広島市)「子ども達の夢や未来を地域で支えようーCSが子ども達に出来ることー」

西部コミュニティ・スクール運営委員会は、「すべては子どもたちのために」を合言葉に、保護者、地域、学校が一体となり小中9年間の子どものための育ちを支えるため、そして、地域の方々の知恵や知識、技術を借りて子どもたちの育ちを考えていきたいという思いのもと、平成25年度に発足しました。

小早川委員長から、CSは、学校・保護者・地域・児童生徒が同じ目標を共有して進めることが何より重要であり、CSで取り組んだ防災訓練が北海道社会貢献賞(R2 防災功労)を受賞したのはその表れ、訓練を通じて児童生徒が一住民として地域に貢献する気構えを養うのが狙い、との発表がありました。事務局を務める西部中学校の小林教頭は、CSの成果として子どもの自尊感情が高まっていること、課題としてはメンバーの高齢化や人材育成を挙げ、CS開始から数年経って大人になった卒業生の存在など、持続可能な組織づくりへの萌芽と期待が述べられました。

最近の取り組み

■CS防災訓練

小6・中3 スクールリーダーを対象とした取組

学校運営協議会において、児童・生徒に「自助・共助」の意識や、地域に貢献し、地域を支える心をはくむことの重要性が話題となりました。そこで、地域コーディネート部が中心となり、「CS防災訓練」を実施しました。児童・生徒と地域が一体となって取組を進める中、災害時における地域での役割や互いに助け合おうとする心が醸成されました。



*写真は新型コロナウイルス蔓延前のH31(R1)年度のものを見せています。

令和2年度 第68回全国高等学校定時制通信制生徒生活体験発表大会 北海道大会最優秀賞の発表

この大会は、全国の定時制・通信制高等学校で学ぶ生徒が、学校や職場、地域社会で、感じ、学んだ貴重な体験を発表するものです。

今回は、中鉢 蒼さん(当時、北海道二セコ高等学校3学年)が発表した「私、適当でも大丈夫」の発表動画を掲載しました。

基調講演

演題

「地域を変える 子どもが変わる 未来が変わる！」 —地域で子どもを見守り育てるために—

としま
NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク

くりばやし ち え こ
理事長 栗林 知絵子 氏



ネットワークの活動

「NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク」は、地域の住民みんなで子ども達をおせっかいして、みんなで育てていこうという思いを共有し、緩やかなつながりを作ることからスタートした東京で活動する団体です。

ネットワークを設立した2012年頃、厚生労働省が、我が国では、相対的に貧困の状況にある子どもが7人に1人いるというデータを発表し、不登校など子ども達を取り巻く様々な課題の背景には、子どもの貧困問題があることも明らかになりました。

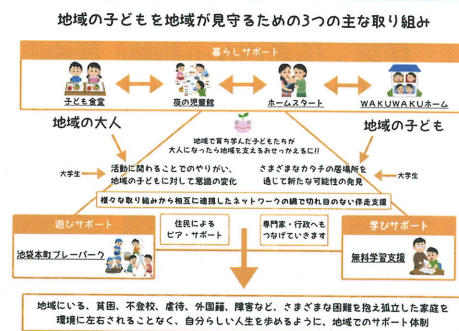
豊島区にも、見えづらいけれど困難を抱えた子ども達があります。私たちは、そのような子ども達を地域で見守り育てるために、主に「子どもの居場所づくり」をテーマに活動しています。

T君との出会い

私は、豊島区が作ったプレーパークという子ども達の遊び場の運営に携わっています。2011年の夏、そこによく遊びに来る中学3年生のT君が「俺、高校に行けるか分からない。勉強の仕方がわからない。勉強を教えてください？」とつぶやきました。それから、毎日、我が家で、時には知り合いの大学生にもお願いしてT君に勉強を教えて、夕食を用意して、いろいろな話もしました。そして、翌年の春、学力がついて無事に都立高校に合格しました。

この受験サポートを通して、T君は、母子家庭で母親がダブルワークのため、夕食はほとんど一人で、500円のコンビニ弁当を食べていたこと、小学校から4回転校し、そのたびに勉強がどんどん分からなくなり、分数、少数といった基礎的な学力が身につけていなかったことを知りました。

このような困難を抱えた子ども達の未来を明るく変えるには何が出来るのかをみんなで考えたことがネットワークの設立のきっかけで、その後の「子ども食堂」と「無料学習支援」といった子どもの居場所づくりに繋がりました。



子どもの居場所 (子ども食堂・無料学習支援・ホームスタート・WAKUWAKUホーム)

2013年、子ども達に温かいご飯をワイワイガヤガヤとみんなで食べることを経験して欲しいという思いで、子ども食堂を始めました。当初は、子どもの食事は親が作るのが当たり前ではないかという周囲の声もありましたが、一人親家庭が増えているので、忙しい母親がほっとできる場所が月に1回あっていいなと思っています。

無料学習支援は、T君が小学生の時に学力的につまづいたことから、その時期の子どもに対する基礎的学力の支援が大切ではないかと考えたことに加え、小学生にかけ算とかの勉強を教えるくらいなら、私たちにも出来るかもと思ったからです。

こうした居場所が出来ると、いろいろな年齢の子ども達が集まり、また、関わる大人たちのネットワークも作られていきます。そうすると、いろいろな困り事が出てきて次の課題が浮き彫りになって、新しい活動が始まるといった街づくりのような循環になっていきました。

そして、2016年、地域の子育て経験者がボランティアで週に1回2時間程度、未就学児のいる家庭を訪問し、一緒にお話、料理や散歩をするなど母親に寄り添う家庭訪問型子育て支援「ホームスタート」を始め、2017年には、地域の子どもが一時的に宿泊できる場所が必要と考え、子どもを緊急に預かって欲しいときの宿泊機能を持つ拠点として、「WAKUWAKUホーム」を開設しました。

これら子どもの居場所に共通するコンセプトは、①地域と子どもがつながる場、②孤立しがちな家庭が地域とつながる場、③地域の交流拠点、④地域のシニア活躍の場です。

コロナ禍における子育て世帯への支援

昨年の春、コロナ禍における学校休校の際にアンケートを実施したところ、給食がないと経済的負担が大きいことが分かったため、急遽、延べ1634世帯への食料支援をした「としまフードサポート」、947食の温かい弁当を配布した「としまランチサポートプロジェクト」を実施し、子育て家庭を支援しました。この両事業については、区役所を始め豊島区内の多くの子育て支援団体、飲食店経営者、社会福祉協議会などの協力、様々な団体、個人からの寄附といった多くの関係者の連携により実現したもので、現在も官民協働の子育て支援事業が展開されています。

「おせっかい」の連鎖へ

現在の社会、特にコロナ禍においては、人と人が繋がりにくい環境になっていて、子育てする時も孤立してしまうケースがあります。「貧困や虐待の連鎖」から、地域住民それぞれの皆さんが今日できることを何かすることによって「おせっかいの連鎖」へと変わっていくことを私たちは願っています。

